

S.Y.アグノン文学の特徴と『アグノット』日本語訳

小久保 乾 門

The Literary Characteristics and a Japanese Translation of “Agunot” by S. Y. Agnon

KOKUBO Solomon

Abstract

Shmuel Yosef Agnon (1888-1970) is one of the greatest Hebrew novelists. He was the first Hebrew writer to be awarded the Nobel Prize for Literature. In spite of his great achievements and international fame, his literary works have not been studied in Japan, and only a very few of his novels have been translated into Japanese. This study examines the writing characteristics of the works of Agnon, and includes my translation of his first novel in The Land of Israel “Agunot”.

Agnon was born in Galicia, in the former Austro-Hungarian Empire. He received a strict, traditional Jewish education in Yiddish, his first language, and also in Hebrew. He also learned modern liberal thought in German. He started to write novels and poems in Yiddish and Hebrew in his childhood.

A sympathizer with the Zionist movement, Agnon decided to emigrate to Israel in 1908. There he published his first book, “Agunot.” With this short novel, he established himself as a major Hebrew writer.

Agnon is called “the successor of Jewish traditional literature,” partially due to the style of Hebrew he adopts. Contrary to most Hebrew writers, who use modern spoken Hebrew, Agnon solely employs traditional Hebrew. He also adopted traditional themes such as “the God of Israel and the nation of Israel” and “the nation of Israel and the land of Israel.” The relationship between God and Israel has been a theme in Hebrew literature since biblical times. Agnon extensively uses this theme even when writing a love story.

With “Agunot,” Agnon founded a literary style that is unique in Israel. This study and my translation of the work will give readers an insight into his masterpiece.

Key Words: Israel, Jewish people, Hebrew literature, Agnon, Zionism

イスラエル ユダヤ人 ヘブライ文学 アグノン シオニズム

1. 現代ヘブライ文学の最高峰 S. Y. アグノン

(1) ユダヤ伝統文学の継承者アグノン

シモエル・ヨセフ・アグノン (1888-1970) は、近代ヘブライ文学の最高峰と称されるノーベル賞作家である。イスラエル人のみならず世界のユダヤ人社会で彼の名を知らない人はほとんどないであろうが、日本においてはまだその文学の紹介や研究はほとんど手が付けられていない。近年日本におけるユダヤ関連の諸分野の研究は活発になりつつあるが、しかしヘブライ文学、とりわけ近代文学に取り組む研究者はまだまだ少数であるし、またアグノン文学の難解さが彼を近づきがたいものになっている。現代ヘブライ語をかなりのレベルで習得し多少の文学作品が読めるようになったとしても、または外国語の翻訳でアグノンの作品を読めたとしても、アグノン文学を深く理解するのはたやすいことではない。

アグノン文学を理解する難しさの一つは、彼が作品の中で引用するユダヤ古典にある。アグノンの多くの作品の中には聖書、ミシュナー、タルムード、ミドラッシュ、中世の聖書注解と詩歌、ユダヤ神秘主義文学、ハスイディズム文学など、ユダヤ人の数千年の歴史の中で生み出されてきた莫大な古典文学が芸術的なハーモニーをかもし出しながら引用され、物語の中で重要な役割を果たす。それらの引用は単なる言葉の表面的引用ではなく、引用される古典原典の文脈と背景にある思想とを十分に理解していなければ、アグノンが何のためにその古典を引用しているのかさえ見当もつかない場合が多い。また一時的な効果を狙った引用の場合もあれば、彼が引用する古典に述べられる思想がその作品の最大のテーマとして読み取れる場合もある。さらに原典の意図する内容が肯定的に生かされる形で引用されている場合もあれば、逆に原典の意図するところとアグノンによる引用の文脈が全くちぐはぐで、引用によって強い皮肉や諧謔が生まれるような場合もある。どの場合であれアグノン作品を理解するためにはユダヤ古典への高度な知識が不可欠であるのは当然であるが、古典そのものの理解に勝って困難であるのは、アグノンがそれをどのように芸術的な手法でアレンジして自分の作品に生かしているのかを読み取り、アグノン文学の面白さと深さを理解することである。

アグノンは旧約聖書以来数千年にわたる伝統的ユダヤ文学の世界と現代ヘブライ文学¹⁾とを繋いだ作家であると言われる。アグノンの「古典の伝統を継承する作家」としての自覚はそのヘブライ語文体にまず現れる。19世紀末から20世紀にかけ、話し言葉としては死

1) 「ユダヤ文学」という場合はユダヤ人が諸言語で書き残した全ての文学を指し、「ヘブライ文学」という場合はヘブライ語で書かれた文学のみを指す。

語となっていたヘブライ語がイスラエルの地のユダヤ人コミュニティーで復活する。現代語として復活して間もないころ、多くのヘブライ語作家たちはできるだけ現実的な話し言葉としてのヘブライ語で作品を書こうと試みた。しかしアグノンはこれらの作家たちと異なり、子供のころから慣れ親しんできた聖書ヘブライ語やラビ・ヘブライ語に近い、あまり感情を高揚させないヘブライ語のスタイルで作品を書き続けた。ヘブライ語によるイスラエル社会が確立し、生きた言語として豊かなヘブライ語が使えるようになった後も、彼はこの伝統的スタイルのヘブライ語に固執した。このアグノンのこのこだわりについてヘブライ大学のゲルション・シャケッド教授は、アグノン自身の言葉を引用して次のように語っている。

アグノンが文章を「古典的」文体で書こうとしたとき、彼は聖典に依存した。彼は自分自身を聖典文学の伝統の継承者とみなしており、1954年のイスラエル賞授賞式でのスピーチで、彼が新しい文体よりも古典的文体を優先するということについてこう語っている。「私は確かに聖なる書物の言葉で書いている。私はこれに関して釈明する。私は父の家にいる時からこのように習慣付けられてきたのであり、私たちの父祖たちである賢者たちもそのように書いてきたのである。」²⁾

この引用からも明らかなように、アグノンは自分自身を伝統文学の正統な継承者として位置付けていた。そのための重要なこだわりの一つが、古典的ヘブライ語で作品を書くことだったのである。

しかしアグノンが「古典文学の継承者」という称号を得ているのは、単にヘブライ語のスタイルのみに拠るのではない。アグノンはさらにその文学の内容においても古典文学の継承を実現しようとする。ユダヤ教は長い歴史の中で常に「神とイスラエル民族の関係」を重大なテーマとして扱ってきた、「民族の救い」がテーマである宗教と言える。聖書が一貫してイスラエル民族と神との関係を描こうとしていることは言うに及ばず、個人の生活の細部までを規定するミシュナーやタルムードなどのユダヤ教法規も「どのようにユダヤ民族を神の選民として守るか」という民族保存の観点なくして決して語れるものではない。

アグノン文学も同様にその作品の中で「神と民族の関係を描く」という基本姿勢に立脚している。たとえ一見男女の恋がテーマであり、個人の内面の動きを深く掘り下げた作品であっても、もう一面そこにはイスラエルの神とユダヤ民族との関係がアレゴリーとして

2) ゲルション・シャケッド著「アグノンの文学芸術」15ページ。

描かれているのである。アグノンが作家として過ごした20世紀初頭から後半、ユダヤ民族はシオニズムの活発化、欧州ユダヤコミュニティーの崩壊、イスラエル国独立という激動の時代を通過する。アグノンはこの時代の民族、また個人の体験を題材としつつ、それを常に「神とユダヤ民族の歴史」という聖典的な視点で眺め、書き表そうとしたと言える。

もちろん彼の文学はその内容において単に古典的スタイルを踏襲しただけではなく、同時に近代的文学者としての覚めた批判的視点も併せ持つ。彼は基本的にはシオニズムに共鳴し、かつ青年期から壮年期の一時期を除き、生涯の多くの日々を律法を遵守する敬虔なユダヤ教徒として過ごした。しかし彼のシオニズムに対する態度、また伝統的宗教に対する態度は必ずしも肯定的な視点ばかりではない。むしろ覚めた目でシオニズムの現実やユダヤ教の伝統を眺め、批判や皮肉をこめて語ることの方が多い。前述したように、古典の引用においても常に古典の持つオリジナルの意味が素直に使われているとは限らず、逆にわざと逆の文脈で皮肉をこめて使われる場合も多い。アグノンは古典的形態と思想を継承しつつ、なお近代文学としてのテーマと批判的視点を見事に組み合わせた作品を書き残してきたのである。しかしそのようなシオニズムや伝統的宗教に対する覚めた批判的視点でさえ、なおアグノンにとっては「神とユダヤ民族の関係を描く」ための道具のひとつであったと思われる。

ユダヤ民族発祥の地であるイスラエルの地にユダヤ民族の国を建設しようとしたシオニズム運動を具体的に推進した主流グループは非宗教的な人々であった。しかしまた多くの宗教的ユダヤ人もそこに「神の手」を見て取った。それは離散したユダヤ人がやがて約束の地、イスラエルにもう一度帰ってくるという聖書の預言の成就であり、さらにユダヤの歴史の究極の目標である「救い主メシアの時代」を予感させる出来事であったのである。アグノンが生まれ故郷のガリツィアからイスラエルの地に移住したそもそもの動機もシオニズム運動への共鳴と宗教的動機が一体となったものであり、またこの「イスラエルに住む」という行為こそが、彼の全生涯にわたる文学作品を生み出す最大のインスピレーションの源であったと言っても過言ではない。

しかしどれほどすばらしい理想でイスラエルに帰還してきたとしても、イスラエル独立以前であれ独立後であれユダヤ人コミュニティーの現実は厳しく、メシアの時代のユートピアとは程遠いものである。「ユダヤ人のイスラエル帰還とコミュニティーの再建という偉大な時代にありながら、ではなぜ未だユートピアは実現しないのか、何が足りないのか」という観点は常にアグノンにとって大きなテーマであった。このなかなか完成に至らない歴史をアグノンはどのような手法で描こうとしたのであろうか。その大きなヒントが、彼の作品に多く描かれる夫婦や男女の関係にある。

（2）神とイスラエル民族³⁾の「夫婦関係」とアグノン文学

ユダヤ教では「神とイスラエル民族の関係」が夫婦関係になぞらえて描かれることが多い⁴⁾。その例は枚挙に暇がないが、聖書から数点だけ引用しておく。エジプトで奴隷状態にあったイスラエル民族はモーセに率いられてエジプトから脱出し、約束の地であるカナン（後のイスラエル）を目指す。その途中、イスラエルの民は彼らの先祖であるアブラハム、イサク、ヤコブの神と永遠の契約を立てる。神はイスラエル民族が約束の地であるカナンに入ったとき、人々がイスラエルの神を捨ててその土地の神々を拝まないように次のように警告する。

その土地の住民と契約を結ばないようにしなさい。彼らがその神々を求めて姦淫を行い、その神々にいけにえをささげるとき、あなたを招き、あなたはそのいけにえを食べるようになる。あなたが彼らの娘を自分の息子にめとると、彼女たちがその神々と姦淫を行い、あなたの息子たちを誘ってその神々と姦淫をおこなわせるようになる。

（出エジプト記 34章15～16節 新共同訳）

このようにイスラエルの神以外の異教の神々を拝むことは、妻が不貞を働いて他の男と性的関係を持つ場合に使われると同じ「姦淫」（ヘブライ語では「**זנות**」）という言葉が使われている。この時代「姦淫」の罪は最も重い罪の一つであり、女性の場合は死罪にあたる。つまり異教の神を拝むという背信行為を、神は最も重い罪として定めるのである。

しかしイスラエルの民はこの罪を犯す。カナンの地に入った後、彼らはその地の神々を拝み、聖書によるとその罪の故に神の警告どおり約束の地を追われることになる。それが紀元前722年のアッシリアによるイスラエル王国の破壊と紀元前586年のバビロニアによるユダ王国の破壊である。イスラエル王国を構成していた十部族はアッシリア帝国内の各地に散らされ、ユダ王国を構成していた二部族の多くはバビロニアに捕囚として連れて行かれる。そしてこの両王国破滅の時代に活躍した預言者たちは、等しくこのイスラエル民族の裏切りを妻の夫に対する裏切りという比喩で語るのである。ユダ王国崩壊の時代に活躍した預言者エレミヤは、イスラエル王国が滅ぼされた後、間もなくユダ王国も続いて滅び

3) 「ユダヤ民族」という概念はバビロニア捕囚以降に生まれたものであるため、それ以前の聖書時代を含めた民族呼称としては「イスラエル民族」を使う。

4) ユダヤ教において「夫婦関係」が比喩的に意味するところは「神とユダヤ民族」の関係だけでなく「ユダヤ民族と安息日」、「イスラエルの地と神の臨在」など、さまざまな種類の関係がある。アグノン作品における夫婦関係描写の研究には当然これらの観点も必要になってくるが、ここでは議論を広げない。

ようというとき、その時代を次のように描写している。

ヨシヤ王の時代に、主は私に言われた。あなたは背信の女イスラエルのしたことを見たか。彼女は高い山の上、茂る木の下のどこにでも行って淫行にふけた。彼女がこのようなことをしたあとにもなお、私は言った。「わたしに立ち帰れ」と。しかし、彼女は立ち帰らなかった。その姉妹である裏切りの女ユダはそれを見た。背信の女イスラエルが姦淫したのを見て、私は彼女を離別し、離縁状を渡した。しかし、裏切りの女であるその姉妹ユダは恐れるどころか、その淫行を続けた。

(エレミヤ書 3 章 6～8 節 新共同訳)

イスラエル民族は「淫行にふける姉妹」なのであり、彼女たちの夫である神は彼女らに「離縁状」を突きつけたのである。以上で明らかのように、神とイスラエルの関係は人間の夫婦関係に喩えられ、そしてイスラエルの民が約束の地であるイスラエルを離れるのは、イスラエルの民が異教の神々に姦淫を行い罪を犯したためであると理解される。そしてイスラエルの民が流浪の地から約束の地に戻ることができるのは、神の憐れみとイスラエルの悔い改めによりこの夫婦関係が修復されるからである。

その日、その時には、と主は言われる。イスラエルの人々が来る。ユダの人々も共に。彼らは泣きながら来て、彼らの神、主を尋ね求める。彼らはシオンへの道を尋ね、顔をそちらに向けて言う。「さあ、行こう」と。彼らは主に結びつき、永遠の契約が忘れられることはない。

(エレミヤ書 50 章 4～5 節 新共同訳)

悔い改めたイスラエルの民が再び約束の地に帰ってくるという箇所は預言書に多く存在するが、これが流浪の地にあるユダヤ人たちの最大の希望であり祈りであった。「我々が流浪の地にあるのは、まだ神との契約、つまり夫婦関係が完全に修復されていないからなのである」という信仰は当然ながらユダヤ教の歴史の中で常に中心的な位置を占めてくる。特にアグノンに直接的な思想的影響を与えているユダヤ神秘主義者たちやハスイディズム派の人々の間ではこの「夫婦関係の修復」は最大の教義の一つであった⁵⁾。

5) ユダヤ神秘主義者が神とイスラエル民族の契約としての婚礼をどれほど重視したかについては、ゲルシヨム・ショーレム『カバラとその象徴的表現』(小岸昭/岡部仁訳)などに詳しい。

アグノンもまた多くの作品において夫婦関係をテーマにした作品を残している。そしてそのほとんどは、たとえ形式上は夫婦となっていたとしても決して体が結ばれなることのない完成しない夫婦関係なのである。この「結ばれない夫婦関係」というテーマは、彼が1908年にイスラエルの地で発表した処女作品である『アグノット』においてすでに確立し、その後書かれた多くの作品の題材となった。アグノンがヘブライ伝統文学の継承者としての自覚をその作品において最大限に表現したテーマの一つは、この「夫婦関係の描写」であろう。彼が「完成しない夫婦関係」を描くのは、近代史を伝統的宗教文学の文脈で捉えようとするアグノンにおいてはむしろ当然である。「夫婦関係の完成」イコール「ユダヤ人の歴史の完成」、つまりメシアの時代の到来なのであるから。

アグノン文学に描かれる夫婦関係の研究は、アグノンがユダヤ民族の近代史を「メシアの時代の到来」というユダヤ教が提示する歴史の完成に至るまでの長い物差しの中で、どのように位置づけし、どのように理解したかを知るための大きな示唆を与えてくれるものであると考える。このようなアグノンの文学者としてのスタンスを確立し、また彼のヘブライ文学者としての地位を確立した記念碑的作品が、今回翻訳を試みる『アグノット』である。

(3) アグノンの生い立ちと「^{エレット・イスラエル}イスラエルの地」との関係

「神とユダヤ民族の関係の修復」という観点から重要な事柄は、「ユダヤ民族のイスラエルへの帰還」である。前述したように近代シオニズムがユダヤ民族に対して与えた宗教的なインパクトは大きなものであったが、アグノン個人にとってもシオニズムへの共感とイスラエルへの帰還は人生最大の転換点であり、作家アグノンを生み出す根源であった。

アグノン（本名はヨセフ・チャーチキス）は1888年、ガリツィア（今のウクライナ、当時はオーストリア・ハンガリー帝国内）のブチャチという町で誕生した。父親は毛皮商人であったがもともとはハスイディズムのラビの家系でもあり、彼に徹底した伝統教育を施した。彼の母語はイディッシュ語であったが、彼は宗教教育の中でヘブライ語を習得し、生涯変わることもなかった伝統的ヘブライ語への限りない愛着はこの少年時代に養われた。以下はアグノンのエッセイ集『私から私へ』に収められた自伝的小説の一部である。

ヘムダットの業績についてはすでに多くの者たちが語り、また今後も多くの者たちが語るであろう。ヘムダットは立派な家庭に育った18歳ほどの青年である。しかしそれがヘムダットの美点の全てではない。彼には別の美点があった。神は彼に詩人の言葉を与えられたのである。彼にはまた別の美点があった。彼の魂は我々の聖なる言葉を

深く愛し、彼はその言葉で詩を書いた。その時代ヘブライ語の重要性は忘れ去られ、皆が外国語を話していたにも関わらず、ヘムダットの目にヘブライ語は重要であった。この事実をもって我々はヘムダットが「ヘブライ語を愛する者は幸いである、ヘブライ語で書き得る者は幸いである」と考えていたことを知ることができる⁶⁾。

ここに登場する「ヘムダット」はアグノン自身であるが、彼が幼少から特別ヘブライ語に対する深い愛情を持っていたことがこの文章に良く現れている。

また彼の母親は伝統教育だけではなく近代的価値観を持つ教養婦人で、アグノンにドイツ語の家庭教師をつけ自らも文学の手ほどきをするなど、ドイツ語を通してアグノンがヨーロッパの近代思想や文学など、伝統的ユダヤ以外の世界に触れる窓を開いた。このことはアグノンがユダヤ古典文学の伝統に根ざした作家というだけではなく、近代作家として偉大な業績を残すための大切な要因となる。

アグノン自身はドイツ語が身につけてきたころの自分について「ヘブライ語以外の言葉がなんとか読めるようになりましてからは、ドイツ語で書かれたものを手当たり次第に読みました⁷⁾」と語っている。彼は当時のガリツィアの他の若者たち同様、ノルウェーのハムスンやビョルンソン、デンマークのヤコブセンら、特にスカンジナビアの文学に熱中した。アグノンの研究者たちはアグノンの作品に多くの外国文学の影響を見出すが、アグノン自身が好んだ文学が前出の『私から私へ』の中で述べられている。これは一部の研究者がアグノン作品に見られる超現実的な幻想世界と、カフカとの類似性を指摘したことについて⁸⁾、アグノン自身がそれに反論して書いた文章である。

カフカは私の精神形成に影響を与えていない。彼が私の精神形成に影響を与えていないということは、彼がたとえ詩篇を書いた十人の賢者のように偉大だとしても、私が彼から学んだことはありえないということだ。私の愉しみはホメロスであり、セルバンテスであり、バルザックであり、ゴーゴリであり、トルストイであり、フロベールであり、ハムスンであり、さらに彼らより無名の作家たちであるが、しかしカフカは

6) 『私から私へ』(מעצמי אל עצמי) 11ページ。

7) 1966年ノーベル賞受賞演説。村岡崇光訳『ノーベル賞文学全集15巻』主婦の友社 1972年 224ページ。

8) 例えばアグノンと長年の親交があったゲルシヨム・ショーレムは、アグノンについて書いたエッセイ『S. Y.アグノン—最後のヘブライ語古典作家か?』の中で、アグノン作品におけるカフカの影響を証明しようとしている。ゲルシヨム・ショーレム著作集『オッド・ダバル』(עוד דבר) 355ページ。

私の愉しみとはならない⁹⁾。

ここでは彼がカフカには影響を受けていないと反論しつつ、彼が好んだ文学者たちの名前を列挙している。彼がこれらの作家に影響を受けたと思われる典型的な例の一つ挙げるなら、『嫁入り準備』(הכנסת כלה) というガリツィアが舞台となった冒険物語がそうである。『嫁入り準備』は、ユダヤの律法やラビの教えに徹底的に忠実に生きる主人公が、従者を連れて娘の持参金を集めるため町々を巡るという冒険物語である。彼が律法に忠実であろうとすればするほど彼の周りには事件が巻き起こり、彼の姿は滑稽に描かれる。「従者をひきつれての滑稽な冒険物語」という物語の組み立てにおいても、伝統に忠実な主人公の滑稽な姿に、伝統に対する痛烈な皮肉が込められているという内容においても、アグノンはあきらかにヨーロッパ近代小説の祖と言われるセルバンテスの『ドン・キホーテ』にヒントを得ている。このようにアグノンはガリツィア時代にすでにユダヤの古典文学とヨーロッパの近代文学という、後に作家活動をするための基礎を築いた。

当時まだまだ脆弱な、イスラエルの地のユダヤ人共同体に移住することになったのは1908年¹⁰⁾、アグノンが19歳の時である。この移住のいきさつについてもアグノン自身が『私から私へ』で語っている言葉を引用しておく。

彼（ヘムダット、つまりアグノン自身のこと—筆者注）は十九の頃、健康な若者であったので軍に徴用されることは明らかであった。軍隊では人々は禁止されている肉を食べ、安息日を汚す。彼の親族たちは軍人たちが彼にそのような律法違反を犯させるのではないかと恐れた。そこで彼らはヘムダットを国外に送り出すことにした。いずこに行くのであろうか？スイスに行って大学に入り、博士号を取得するか。はたまたアメリカに行って富を蓄えるか。人にとって博士になり、富豪になるのは喜びである。他の全ての人たちはこれらのものを求めるであろう。しかしヘムダットは神からスイスに行く以上の、そしてアメリカに下る以上の知恵を与えられていた。彼はイスラエルの地に上ることを望んだのである。奇妙なことがあった。当時すでにユダヤ人居住地ができているということは聞こえており、全ての新聞はイスラエルの地について書き、全ての論客たちはイスラエルの地について語っていたのであるが、町の中にもそ

9) 『私から私へ』(מעצמי אל עצמי) 245ページ。

10) 資料によってはアグノンのイスラエルの地への移住を1907年とするものもある。ここではヘブライ大学のゲルシオン・シャケッド教授の著書『ヘブライ散文文学1880-1980』の記述に従って1908年とした。

の周辺にも、誰もイスラエルの地に行ったことがある者はなかったのである。すでに「誇張して伝えられている。まともな人間が関わる問題じゃない」と主張する冷めた者たちもいた。しかし町では軍の召集が近いという情報が流れ、これ以上ヘムダットを留まらせることはできないため、彼がイスラエルの地に行くことは許可された。許可されたため彼は旅支度を整えた¹¹⁾。

この文章によれば、少年時代のアグノンがイスラエルの地に渡る直接のきっかけとなったのは兵役逃れである。アグノンの生涯には何度か大きな転換点が訪れるが、ここにその第一回目の転換点が訪れる。ここに言及されるシオニズム運動は後日現在のイスラエル国の建国に繋がる運動として大きく発展するのであるが、当時としてはまだまだほんの一握りの人々の小さな運動であり、イスラエルの地は貧しく失業者が溢れていた。将来の立身出世を考えるなら貧しいイスラエルの地に移住するより、スイスやアメリカに移住するのが賢明である。実際彼の近隣者の多くは、イスラエルの地行きに賛成しなかったのである。しかしアグノンの心にはすでにイスラエルの地に帰還する決心が芽生えていた。アグノンは後に「私は19歳と6ヶ月のとき、イスラエルの地に移ってその土地を耕し、自らの労働によって暮らしをたてる決意をいたしました¹²⁾」と、近代シオニズムの基本精神である「農業によってイスラエルの地を耕す」という当時の決心を述懐している。そしてその決心は「神からスイスに行く以上の、そしてアメリカに下る以上の知恵を与えられていた」とあるとおり、アグノンにとっては自らの決断というより、神から与えられた知恵であったのである。

イスラエルの地への帰還は聖なる行動である、とアグノン自身が信じていたことを証明する文章がほかにもある。引用が多くなるが、アグノンの基本的思想を理解するために重要と思われるので引用しておく。まず『私から私へ』からの引用である。この場面は主人公ヘムダットがイスラエルの地に向かう途中、ガリツィア地方の中心都市レンベルグに立ち寄ったところである。彼は偶然イディッシュ語新聞を出版している印刷所を訪ねる事になる。そこで主人を待っている間、彼はひとりで事務所に残されていた。

ヘムダットは活字を並べる枠組みのそばに一人残された。たくさんの活字は箱ごとに、職人が来て文字と文字を繋ぎ合わせて文章を組み立てるまでは、同じ文字が百以上も

11) 『私から私へ』 (מעצמי אל עצמי) 12ページ。

12) 1966年ノーベル賞受賞演説。村岡崇光訳『ノーベル賞文学全集15巻』主婦の友社 1972年223ページ。

何の意味も脈絡もなく退屈そうに並べられている。ヘムダットの思想もまたこの文字のようなものであった。神が彼をふさわしい場所に連れてくるまでは¹³⁾。

この表現にアグノンが持っていたシオニズム観を、そしてまた彼の文学者としての基本的立脚点を見る事ができる。アグノン個人にとっても文学者として花開く場所は「神に連れてこられたもっとも相応しい場所」、つまりイスラエルでなければならない。この考えは例えば『アグノット』に登場する芸術家「ベン・ウリー」の描写でも明らかである。ここではベン・ウリーがイスラエルの地で初めて仕事をした時に、今までにない霊的な高揚をもって仕事をする様子が描かれる。この「イスラエルの地に戻る芸術家」というモチーフは、アグノンが一貫してテーマとした「神とユダヤ民族との関係の修復」を描写するための一つの表現方法である。

アグノンはイスラエルの地に帰還した後、1912年から1924年までドイツで過ごす。この時代については後述するが、彼が再びイスラエルの地に帰還しようとしたのは、火事に遭って彼がドイツで収集した貴重な資料や文学作品を全て失ってしまったからである。この事件についてもアグノンは述懐している。

その火災で失ったもののなかには、およそ七百頁から成る長編小説がありましたが、その前編はちかぢか出版を予告されていたものでした。『永遠の生命』と題するこの作品とともに、私がイスラエルの地を離れて異郷の地に身をおくようになって以来書きためていたものは一切失われました。そのほかにも、マルチン・ブーバーと共著の作品、先祖代々伝わってきた四千冊のヘブライ語の書籍ならびに私が生活費をきりつめて買いあつめたものなどが焼失しました。（中略）

全財産を灰にしてしまいました私に、神はエルサレムに戻れという知恵を授けて下さいました。こうして古巣エルサレムに戻った私が、神が私の心とペンとに伝え給うたことを書き著すようになりましたのも、これすべてエルサレムの力に負うものであります¹⁴⁾。

ここでも、アグノンにとってイスラエルの地に帰還するということは神に導かれる聖なる行為である、との表明を見る事ができる。近代シオニズムを中心になって担ったのは非

13) 『私から私へ』(מעצמי אל עצמי) 15ページ。

14) 1966年ノーベル賞受賞演説。村岡崇光訳『ノーベル賞文学全集15巻』主婦の友社 1972年224ページ。

宗教的グループであり、その理念は非宗教的共同体の建設であった。アグノンはその運動に参加しつつ、またそのグループと深い接触を持ちつつ、同時に常に「聖なる歴史」の視点で現在を捉えようとしたのである。アグノンにとってユダヤ民族が関わる全ての現象は、それが個人であれ集団であれ、常に神との関係で把握されるのである。

1908年のイスラエルの地への移住はアグノンの作家活動にとって大きな転換期となった。アグノンは生活のためさまざまな仕事を体験しつつ、同時にヤッフォを中心に活動していた作家たちのグループに入って作家活動も始める。イスラエルの地で最初に書かれた作品が『アグノット』であるが、このとき使用した「アグノン」というペンネームが後に彼の生涯の正式な苗字となる。『アグノット』や1912年に発表する『ヴェハヤー ヘアクーヴ レミシヨル』（イザヤ書40章5節「曲がったところは真っ直ぐになる」の意味）などはこの時代のヘブライ文学作家たちの指導者的存在であったブレインルに高く評価され、アグノンは一流作家の仲間入りを果たしたのである。

1913年から1924年に亘ってアグノンはドイツに住むが、この時代、彼は人生に大きな影響を与える人物と次々に出会う。生涯の伴侶、エステル・マルクスとの結婚（1920年）、そしてアグノンの生涯の友人でありパトロンとなる、ザルマン・ショッケンとの出会いなどである。ショッケンはアメリカやパレスチナに出版社を作った人物で、ドイツでの出会い以降、アグノン作品の出版は全て彼の手によってなされた。現代に至るまでアグノン作品の著作権の多くはショッケン出版が所有している。

さらにこの時代、アグノンはマルチン・ブーバーやゲルシヨム・ショーレムといった偉大なユダヤ哲学者らと親交を深め、特にブーバーとは共同でハスイディズム物語など、埋もれていたユダヤ古典の収集を行う。後にアグノンは、ミドラッシュユアガダー、ハスイディズムの物語ばかりを集めた叢書をユダヤのお祭りに合わせて三冊（『畏れの日々』1938年、『本、作家、物語』1938年、『義人たちの物語』1961年）出版するが、それはドイツ時代の研究がどれほど実り多いものであったかを証明する。この時代アグノンが収集した約四千冊のヘブライ語古典、そして彼が書いた小説などは自宅の火災によって全て消失してまったことは前述した。そしてその悲劇を神の啓示として捉えたアグノンは、再びイスラエルに戻りエルサレムに住んで創作活動をする決心をし、その後は生涯に亘ってエルサレムに住むのである。

以上に紹介した彼の生い立ち、そして彼自身が書き、語った言葉により、イスラエルの地に帰還するという要因が彼の作家活動にとって決定的なインスピレーションの源になっていたことは疑いようがない。そしてアグノンのこの個人的体験は、アグノン文学に登場する多くの登場人物を作り出す題材となり、またユダヤ民族がイスラエルの地に帰還する

ことによってもたらされる「神とユダヤ民族との関係修復」という壮大な歴史的、ユダヤ教神学的テーマとも直結しているのである。

2. 『アグノット』—日本語訳

アグノット¹⁵⁾

聖地 — 堅く建てられよ¹⁶⁾ — のラビの物語

スィムハ・ベン・ツイオン¹⁷⁾ に捧げる

アレフ

聖なる書物にはイスラエルの人々の行為によって紡がれる恵みの糸¹⁸⁾ について書かれている。神は栄光の中に座し、自らその糸で恵みと憐れみとに満ちた全く傷のない布を織り給い、イスラエルの民はその中に身を包む。その布の麗しい栄光はたとえ流浪の地にあるとも、王国の町、王の神殿¹⁹⁾ において父の家にいる乙女²⁰⁾ のようにも輝くのである。彼女が敵の地にありてなお少しも汚れず、穢れのない姿を神がご覧になる時、彼女に向かって頷きつつ彼女を讃えて言われる。「恋人よ、あなたは美しい。あなたは美しい²¹⁾。」こ

15) 「アグノット」とは、夫が行方不明になってその生死も不明な場合など、正式な離縁状を貰えないため、再婚もできない状態の女性のこと。この作品以降「アグノン」は彼の作家名となり、やがては正式な苗字になる。

16) 「堅く建てられよ」という言葉の元は聖書民数記21章27節「シホンの都は堅く建てられる」という箇所であるが、のちにユダヤ教聖典では「エルサレムの再建」の文脈で使われる言葉となる。「エルサレム」の枕詞のように使われるが、ここでアグノンは「聖地」という言葉につけて使っている。

17) 『アグノット』が発表された雑誌『ハオメル』の編集長。アグノンは一時期彼の秘書も勤めた。

18) 例えばタルムード、ハギガーの章12-bには「夜中にトーラーを学ぶ者に、神は昼、恵みの糸を垂れ給う」とある。

19) エルサレムとその神殿を指す。ツファットのラビ・シュロモー・アルカベツ（1505～1584）によって作られた安息日を迎える詩、「レハー・ドディ」に使われている表現。

20) 民数記30章4節などに登場する表現。まだ結婚して家を離れていない若い娘のこと。ここでは約束の地であるイスラエルにいる乙女のこと。

21) 雅歌1章15節、「恋人」は「神の花嫁であるイスラエル」と解釈される。「アグノット」の導入部分には雅歌の引用が非常に多い。雅歌は聖書の中では特殊な書で男女の恋歌が綴られているのであるが、「神とイスラエル民族の関係を歌っている」という解釈がなされて聖典として残された。神と民族の関係修復をテーマとするアグノン文学に深く関わりのある書でもある。この前置き部分では古代における神との麗しい関係、罪による挫折、悔悟

れこそイスラエルの全ての人を感じる偉大さの秘密、力、高揚、そして恋人たちの愛²²⁾である。しかし時には躓きがあり、おお神よ救い給え²³⁾、その糸は布の途中で切り裂かれ、布は傷物となり、悪い風がその中に吹き荒れて布をずたずたに切り裂き、突然恥の感情が皆を襲い、裸であることを知るのである²⁴⁾。安息日は失われ、祭りは汚され、彼らは冠に代えて灰を被る²⁵⁾。その時イスラエルの民は深い悲しみに迷い入り「彼らは私を打ち、傷を負わせ、私の着物を剥ぎ取った²⁶⁾」と泣き叫ぶのである。彼女の恋人はすでに去った後²⁷⁾で、彼女は彼を求めてうめき声をあげ「もしあなた方が私の恋人を見かけましたなら、私は恋の病に罹っているとどうかお伝え下さい²⁸⁾」と言うのである。この恋の病は、おお神よ救い給え、鬱病を引き起こし、天の高きところから我々に霊が注がれ²⁹⁾、再び彼らが自らの栄光となる善き行いを積み、かの恵みと憐れみの糸を神の御前に再び紡ぎ始めるまで続くのである。

作者はこれから語ろうとする物語においてこのことを意図している。それは聖なる地における偉大なる行い、流浪の地から聖なる町エルサレム ―堅く建てられよ― に上ろうとした大富豪、アヒエゼル氏の行いの物語である。大富豪は聖なる地の修復を大々的に行い、もし我らの時代に神がその臨在³⁰⁾を急ぎシオンに返されるならば³¹⁾、天の宮殿に入る

と神への立ち返り、関係修復という、ユダヤ教の持つ歴史観が雅歌の引用をちりばめながら語られる。アグノンの全生涯を貫くテーマの凝縮がすでにこのイスラエルの地における処女作品の最初に見られるのである。

22) 「恋人たち」とは神とイスラエル民族のことである。

23) ヘブライ語独特の言い回しで、悪いことを口にする時に使う決まり文句。

24) 罪の根源を語る創世記3章のアダムとイブの物語参照。

25) イザヤ書61章3節「灰に代えて冠をかぶらせ」。イザヤは神殿の崩壊で喪に服している状態(灰を被る)から、やがて民族の栄光を取り戻す(冠をかぶる)と預言している。ここから、預言と逆の「冠に代えて灰をかぶる」とは、聖なるものを汚す行為を指す言葉として、ユダヤ教聖典に多く使われる。

26) 雅歌5章7節「町をめぐる夜警に私は見つかり、打たれて傷を負いました」。

27) 雅歌5章6節「戸を開いたときには、恋しい人は去った後でした」。

28) 雅歌5章8節「エルサレムの乙女たちよ、誓って下さい。もし私の恋しい人を見かけたら、私が恋の病にかかっていることを、その人に伝え」と。

29) イザヤ32章15節「ついに我々の上に、霊が高い天から注がれる」。

30) この言葉は、かつてエルサレムの神殿にあった神ご自身の臨在を指す言葉である。ユダヤ教によると、エルサレムの神殿崩壊とともにこの「臨在」もエルサレムを去り、エルサレムが再建されるまで流浪しているのである。

31) 「急ぎ、我らの時代に」という言葉は、エルサレムの再建が語られる時によく使われる言葉である。

権利を得ることができるよう、崩壊した回廊を少しでも修復しようとしたのである³²⁾。

彼は成功しなかったが、しかしこの富豪が生ける者たちの地³³⁾で同胞の兄弟たちと共に
行った行為は、神は良く記憶して下さるであろう。

アヒエゼル氏には男子がなかった。しかし娘が一人与えられたことについて、彼は祝福
された方の名³⁴⁾を日に七度賛美した³⁵⁾。彼は娘を自分の瞳のように大切に守り³⁶⁾、侍女と
召使たちをたてて彼女に仕えさせ、彼女の口から出る言葉のひとつひとつは、王にふさわ
しい豊かさ³⁷⁾ただちに叶えられた。また実に彼女はこの榮譽を受けるにふさわしく、
あまたの優美なるものは彼女の中に結び合わされていた。その顔の輝きは王の娘のよう
であり、神に忠実で敬虔であることイスラエルの母³⁸⁾の一人のようであり、彼女が語る声
はダビデの豎琴、彼女の歩む様子には誇りと慎ましさとが伴っていた。彼女の栄光の輝き
は邸宅の奥の部屋に隠されており³⁹⁾、陽が傾く夕刻、彼女が邸宅のハーブ畑やバラ園を散
歩し、庭に飛び交う鳩の群れがクルークルーと彼女に親しく語りかけ、聖櫃の上の黄金の
ケルビム⁴⁰⁾のようにその翼で彼女を覆っている様子を、この富豪の邸宅に出入りする者
たちがまれに見かけるくらいであった。

32) この文の元になっているのは、ミシュナー アボットの章、4-16「(天の) 宮殿に入るに相
応しいものとなるよう、参考書で自らを備えなさい」というラビ・アキバの言葉である。
これは「良い行いを積んで、天で永遠の生命を得るよう備えをしなさい」という意味であ
るが、ここで「参考書」と訳される言葉と、上記本分で「回廊」と訳されている言葉はヘ
ブライ語では同じ言葉であり、「備える」と「修復する」は同じ言葉である。ユダヤ教では
神殿崩壊とともにエルサレムを去った「神の臨在」は、神殿の復興とともに再び戻るとさ
れている。

33) 詩篇116篇9節「生ける者たちの地」。中世の聖書注解者ラッシーはこの言葉を「イスラ
エルの地」と解釈しており、ここではその意味で使われている。

34) ヘブライ語による神の呼び名の一つ。

35) 詩篇119篇164節「日に七度、私はあなたを賛美します」。

36) 詩篇17篇8節「瞳のように私を守り」。

37) 列王上10章13節、エステル記1章7節など、王がその妃などに贈り物をする時に「王にふ
さわしい、豊かな贈り物した」という意味で使われる言葉。

38) 創世記に登場するサラ、リベカ、レア、ラケルのこと。

39) 詩篇45篇14節「王妃は栄光に輝き、進み入る」。新共同訳で「進み入る」と訳されてい
るヘブライ語「הִינְיָמָה」は、本来「内側へ」という意味で、エベン・エズラの注解では「(王妃は)
宮殿の奥に住んでおり、その姿を現すことがなかった」と解釈されている。アグノンの引
用はこの解釈に基づく。

40) かつてエルサレムの神殿の、最も聖なる場所である至聖所には神とイスラエルとの契約の
板が収められた「聖櫃」があった。その聖櫃の上には黄金の「ケルビム」(神の天使)が飾
られていた。

彼女が適齢期に達した時、父親は全地のイスラエル共同体の中に使者を遣わし、娘に相応しい世界にこれ以上はないと思われる完璧無比な青年を捜し求めた。ここに悪魔が介入し、人々は「アヒエゼル氏は離散の地の人々の中に婿を捜し求めて使者を送り、イスラエルの地の全ての律法学院とユダヤ^{ベイトミッドラッシュ}とユダヤ^{イェシバ}教学院とを辱めた」と陰口を叩き始めた。しかし一体誰が彼のような偉大な人物に、こうせよなどと言うことができるであろうか。この秘蔵の高貴な娘、彼の麗しの一人娘、贅むべきエルサレムの娘に神は一体どのような縁組をなさるのか誰もが興味を持った。

やがて数ヶ月の後、使者たちから書簡が届いた。その書簡には次のように書かれていた。「我々は良き知らせをもたらす人々の一人となりました。神の助けにより、私達はポーランド国にすばらしい人物を見出しました。容姿は端麗、主の律法がその内臓にあり⁴¹⁾、周囲の誰よりも優れており、敬虔で家柄も良く、謙虚で、その知恵は七本の柱を刻んで建て⁴²⁾、賞賛に値する立派な青年で、当代の賢人たちはこぞって彼に誉れを与えており、誰もがこの組み合わせに対しては⁴³⁾ 精神と力を尽くして⁴⁴⁾ 『良し』と言うでしょう。」

富豪は彼の思いが叶ったことを見て心の中で言った。「このような婿はエルサレムの大きなユダヤ^{イェシバ}教学院で教えるのが良からう。そしてシオンから出る律法⁴⁵⁾ を聞きに、世界中から彼のもとに生徒たちが押しかけて来るだろう。」彼は何をしたか。彼は一流の名工たちを集め壮麗な御殿を建て、漆喰を塗り、絵を描き、装飾を施し、主を学ぶ学びに何らの不足がないよう、何台もの貨車を一杯にして高貴な書物を買入れ、かの賢者の祈りが学び場のすぐそばで行えるよう祈りのためのささやかな聖所⁴⁶⁾ を建て、そこにさまざま

41) ミッドラッシュ・エリファフ・ラバー 2 章 5 節「己をくびきに繋がれた牛のごとく、荷を背負ったロバのごとくにして毎日座して主の律法を口ずさむ者は幸いである。ただちに主の霊は彼に満ち、主の律法は彼の内臓に溢れる」から引用されている。

42) 箴言 9 章 1 節「知恵は家を建て、七本の柱を刻んで立てた」から引用。

43) イザヤ書 41 章 7 節「その接着剤について『それは良い』と言う」という箇所引用。この聖句はその後、主に人がある神様を受け入れることを指して「合一することに合意する」との意味で使われるようになる。ここでアグノン「結婚」の意味で引用している。

44) 申命記 6 章 5 節「あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならない」など、本来この表現は神を愛する、神の律法を守る、神に立ち返る、などの文脈で使われるべき表現であるが、アグノンはこの縁組の相応しさを強調する表現として使っている。

45) イザヤ書 2 章 3 節「律法はシオンから出、主の言葉はエルサレムから出るからである」。

46) エゼキエル書 11 章 16 節「しかし私は彼らが言った国々において、彼らのためにささやかな聖所となった」からの引用。ここではイスラエルの人々が離散した各地において、神ご自身が「ささやかな聖所」になると言っておられるが、これは多くの注解で「シナゴグ」と解釈されている。

な装飾を施し、写本家ら呼んでトーラーの巻物を書かせ、金銀細工師らに巻物のための装飾品を作らせ、彼がその場で「この方こそわが神、私は彼をあがめる」⁴⁷⁾と言うに相応しい場所となした。富豪はこの主の家の壮麗さをより完璧にするために、聖櫃⁴⁸⁾をこれまで誰も見たことがない美しいものとするよう心を尽くした。

彼はそれにふさわしい名工を探し始めた。やがて芸術家たちのなかに一人、ベン・ウリーという名の秀でた技術を持つ芸術家を見出した。この男は寡黙で謙虚であり、一見平凡な職人のようであるが、しかし彼の目と手の業には溢れるような靈感が見て取れた。富豪は彼に聖櫃の仕事を託した。

ベイト

アヒエゼル氏はベン・ウリーを連れてきて家の地下室に彼の仕事をあてがった。彼は自分の道具を持ち込み仕事の準備を始めた。すると直ちに彼は異なる霊に捉えられ、彼の両手は仕事をしたが唇は一日中喜びの歌を歌っていた⁴⁹⁾。

アヒエゼル氏の娘、ディナーはそれを聞き、窓の傍らに立って外を窺いながら聞き入り、彼女はまるで魔法にかけられたように、おお神よ救い給え、作業場の方に心が引きつけられた。また彼女は侍女たちを伴ってこの芸術家の仕事を見に下って行き、聖櫃を見つめ、絵の具を混ぜ、装飾を観察し道具を手に取りなどしたが、ベン・ウリーは仕事を続け、箱の一部分を磨きながら歌を歌い、磨いては歌った。ディナーは彼の声を聞きつつ魂を奪われた。彼もまたしっかりと心に刻まれ、永遠にその場に残ると思われる抑揚を持つその声で彼女の心を引付けようと意識した。しかしやがてベン・ウリーは仕事により没頭し、目と心とは完全に聖櫃に注がれたので、彼には聖なる霊が満ちないところがない⁵⁰⁾ほどで

47) 出エジプト記15章2節。

48) もともとはイスラエルの神殿で契約の板を取めたお御輿の形をした箱（「契約の箱」、または「神の箱」とも呼ばれる）のことだが、その後シナゴグなどでトーラーの巻物を保管しておく箱の意味で使われるようになる。ここでは後者の意味。

49) 「異なる霊」とは民数記14章24節に登場する言葉で、モーセの僕カレブが、他の者たちとは「異なる精神を持っていた」ため、約束の地に入ることを許されるという肯定的文脈で使われている。アグノンがこの場面で「異なる霊」という言葉を使い、さらにこの職人がその霊に捕らえられたために歌を歌い始めているのは読者には奇妙に感じられるかもしれないが、これは民数記を注解しているラッシーなどの注解者が上記民数記の箇所を「(カレブには)二つの霊が存在した。一つは心に、一つは口に」と解釈していることによると思われる。つまりこの場面では、ベン・ウリーが作業をする心と、歌を歌う口とにそれぞれ異なる精神（霊）が同時に存在したのである。

50) ユダヤ神秘主義の用語で「神の臨在しない場所がない」との意味。

あった。やがてベン・ウリーはディナーを思い出さなくなった。しばらくすると彼は歌うことを止めその声も聞こえなくなった。彼は一日中身を屈めて立ち、聖櫃に美しい形を彫り込み、そこに生きた靈魂を吹き込んだ。聖櫃の上には獅子が立っていたが、幾重もの黄金のたてがみがあり、その口は神の偉大さを表す歌で満ちていた。聖櫃を覆う幕の上には鷲がその翼を上に向かって広げ、かの聖なる生き物⁵¹⁾に向かって飛び翔けるかのようであり、聖櫃が開かれる時に鳴る黄金の鐘の音を彼らが聞く時、ただちにその場に立ち上がってその翼を打ち鳴らし、鐘の音にさらなる音色を加えるのである⁵²⁾。すでにエルサレムの名士たちは、この聖櫃が富豪によって建てられる主の家に上げられ、金銀の冠とあらゆる聖なる装飾品とで飾られたトーラーの巻物がそこに収められる日の聖櫃の献呈式に出席をしようと準備を整えていた。

ベン・ウリーは彼の聖櫃の前に屈んで立ち、それまで経験したことのないほどの覚醒状態で聖櫃を美しく仕上げた。彼はどの国でも、どの町でも、今まで行ってきたどの仕事においても、かつて神の臨在が顕現し、我々の多くの罪の故にその臨在が離れ去ったこの場所⁵³⁾で感じるような感じは受けたことがなかった。しばらくして彼は仕事を終えた。ベン・ウリーは彼の手になる作品を眺め、それが存在し完成していることに驚いたが、彼自身は空の器のようであった。彼の魂は悲しみに満たされ、泣き出した。

ベン・ウリーは体を少し元気づけるために澄んだ空気を吸おうと庭の木立に出た。太陽は西に沈み空の面は赤く染まっていた。ベン・ウリーは庭のはずれまで降り、横になって眠った。同じころディナーが部屋を出た。夜のとぼりは彼女の身体を覆い、彼女の顔には畏れがあった。彼女は幾日もベン・ウリーの声を聞かず、その姿も見ていなかった。彼女は彼の手になる作品を見ようと彼の部屋に入ったが、彼を見出さなかった⁵⁴⁾。ディナーはベン・ウリーの部屋に立ち、神の箱はベン・ウリーがいつも仕事をしていた場所の開いた窓のそばにあった。彼女は聖櫃に近づき見つめた。その時サタンが来て彼女の心に嫉妬を入れた。サタンは彼女に指で聖櫃を示し、彼女に言った。「お前はどうか。一体誰がベン・ウリーの声を黙らせたのか。この聖櫃ではないか。」サタンが彼女と話しているうちに、彼女は聖櫃に触れて押し倒した。聖櫃は傾き、開いた窓から落ちていった。

聖櫃は落ちたがどこも傷つかず、どの部品も壊れず、窓の後の庭の草の芽の間に転がっ

51) ダニエル書 9 章 21 節に登場するガブリエル天使のこと。

52) ミシュナー「アラヒン」2 章 6 節など。神殿におけるレビ人のコーラス隊で、子供のレビ人が大人に混じって「歌声に色を加える」という意味で使われる表現。

53) つまりエルサレムのこと。

54) 雅歌 5 章 6 節「求めてもあの人は見つかりません。呼び求めても、答えてくれません。」

ていた。ユリや花々がまるで死人の棺に置かれた花のように、聖櫃の上で揺れていた。夜中になると絹でできた黒い聖幕⁵⁵⁾が聖櫃の上に広げられ、雲の合間から月が覗き、銀糸にも似た光の刺繍で聖幕の上にダビデの星の形を作り出した。

ギメル

夜中になりディナーは寢床に就いたが、彼女の心は目覚めていた⁵⁶⁾。彼女の悪と罪は大きく、誰がそれを負うことができるだろうか？ ディナーは強い後悔と恥辱とに襲われ、布団で顔を覆った。一体天に目を上げて憐れみを請うことなどできようか。ディナーは寝台から飛び起きて燭台に蠟燭を点すと、大きな鏡が彼女の向かい側にその蠟燭を映し出した。義しい人であった母親の鏡には、彼女の顔の光は全く映し出されなかった。もし今ディナーが母親の前に立ったなら、罪を犯し神に反逆したその顔を彼女に見せることになるだろう。「お母さん、お母さん」彼女の心は叫んでいたが、しかし応えはなかった。ディナーは窓の方に進み寄り、頭を左に突き出して外を覗いた。エルサレムはその周囲を山々に囲まれており、風が下ってきて彼女の部屋の中に吹き込み、あたかも床に就く病人のためであるかのように蠟燭を消し⁵⁷⁾、彼女の髪の毛を巻き上げてくしゃくしゃにし、そしてベン・ウリーの歌うメロディーのような心地よいメロディーを運んできた。

彼はどこにいるのか？

ベン・ウリーは庭の木々の間⁵⁸⁾で、弦が切れそのメロディーが消え去った豎琴のように横たわっていた。聖櫃は庭に置かれていた。夜の将軍がその闇の翼を広げ、聖櫃の上の獅子と鷲はその陰に隠された。透き通った月が雲の合間から姿を現し、同時に二つ目の月が庭の池に昇り、あたかも安息日の二本の蠟燭のようにそれら是一对となった。このときの聖櫃は何に似ていたであろうか？ 両手を差し伸べて祈る女性である。彼女の両の乳房である契約の板は、祈りによって彼女の心と共に天の父の前に高く揚げられる。天の支配者よ、あなたが息を吹き込まれたこの魂をあなたは彼の中から取り去り、今や彼はあなたの前に魂の抜けた体のように横たわっています。そしてあちらでは、ディナーの御心にかな

55) もともとはイスラエルの神殿の、最も聖なる部分である「至聖所」の前に掛けられていた幕を表す言葉。その後シナゴグの聖櫃に掛けられる幕を指すようになる。

56) 雅歌 5 章 2 節「眠っていてもわたしの心は目覚めていました」。

57) バビロニア・タルムード、シャバットの項、22-2 に、安息日の蠟燭を消すことが許される項目の一つに、病人が就寝できるように蠟燭を消す場合が含まれている。そのことを受けて、あたかも病人であるディナーが休むためであるかのように、風が蠟燭を消した、と書かれているのである。

58) 雅歌 6 章 2 節「わたしの恋しい人は園に 香り草の花床に降りて行きました」。

った魂が抜け殻になっています。いつまであなたの世の魂たちは悲しみ、あなたの宮殿の歌は、嘆き叫ぶのでしょうか？

エルサレムの全てのイスラエル人々が、聖櫃を作業主の部屋からシナゴグに担ぎ上げるため集まってきた。彼らはベン・ウリーの部屋に入ったがそこには神の箱はなかった。彼らはおのき叫んで言った。「聖櫃はどこにあるのか？聖櫃はどこにあるのか？」彼らが叫んでいるうちに聖櫃が窓の外の庭に置かれているのが見えた。彼らは聖櫃を作った者に対して怒りを発して言った。「この男は無責任な悪人に違いない。彼の手によって作られたものは聖なる仕事とは言えない。それで天がこの聖櫃を捨ててしまったのだ。」ラビはこの聖櫃を封印する判断を下した。二人のアラブ人がやって来て、この聖櫃を材木所に運び入れた。全イスラエルは失望し、戸惑いながら立ち去った。

曙が暗闇を破り東の空を照らした。エルサレムの人々は辛い夢から目覚めた人々のように目覚めた。聖櫃と共に喜びと愉しみも隠されてしまい、芸術家はいなくなり誰もその行方を知らなかった。そして富豪の家は不安に覆われた。

窓越しにディナーの姿が一日中透けて見えた。彼女は天に目をあげたり、また罪人のようにうつむいたりしていた。富豪のアヒエゼル氏は悲しみに暮れた。彼が建てたシナゴグは未だに空っぽで聖櫃もなく、トーラーもなく、祈りもなかった。富豪は急いでベン・ウリーの聖櫃の代わりに別の聖櫃を注文した。それをシナゴグに設置したが、それはあたかも神殿崩壊の記念のように見えた。シナゴグに来て祈るものは皆、すぐに重い憂鬱に襲われ、おお神よ救い給え、彼は逃げて出て行き、他の聖なる場所に入って主の前に苦しみを訴えるのであった。

ダレット

鳥のさえずる時が来た⁵⁹⁾。婚礼の日が近くなり、アヒエゼル氏の家ではパンが捏ねられて焼かれ、料理が作られ、彼の娘がエゼキエル氏という有望な同世代の男子と天蓋に入る日に、庭の諸門に飾るための美しい幕も運び込まれた。

そして見よ、良き訪れを伝える者たちの足は山々の上にある⁶⁰⁾。特使が「三日後のために準備をするように⁶¹⁾」と書かれた書簡を手にしてやって来た。皆の者たちが花婿、花嫁の

59) 雅歌 2 章 12 節「恋の季節」の意味。ただし雅歌のミドラッシュではこれは「メシア到来の季節」という解釈がされている。

60) ナホム書 2 章 1 節「見よ、良い知らせを伝え 平和を告げる者の足は山の上に行く」またはイザヤ書 52 章 7 節「いかに美しいことか 山々を歩き巡り、良い知らせを伝える者の足は」。

61) 出エジプト記 19 章 10 節「三日目のために準備させなさい。」ここでは主がシナイ山にくり、トーラーをイスラエルの民に与えられるための準備が語られる。

喜びに共に預かろうと準備を始め、人々は「使者たちがポーランドのタルムードの海から、高価な真珠を見つけ出してきた。婚礼の式はエルサレムがその息子たちを流浪に出してのちこの方⁶²⁾ 見たこともないようなものになるだろう」と噂した。エルサレムの人々は花婿を迎えるために出てきて大いなる敬意を示し、太鼓と踊り、シンバルをもって彼をアヒエゼル氏の邸宅まで送り届けた。彼の容姿は王のようでありその口は真珠を生み出した⁶³⁾。婚礼の日が来た。花嫁はラビの許に連れて行かれ、ラビの口から祝福を授かった。花嫁は声を上げ、泣きながら言った「皆を私のそばから遠ざけて下さい」。全ての人々が部屋を出たとき、彼女はラビに聖櫃を思わず落としてしまったときの出来事をすべて語った。ラビは驚きあわて、一体どうしたものかと困惑した。しかし今日は花嫁である彼女にとって、許しと放免の日であるため、彼女の心に慰めの言葉を語り聞かせた。ラビは言った「わが娘よ、我らが賢者たちは、人が花嫁を娶った時彼の罪は砕け散る⁶⁴⁾」とっておる。ここでは『男』ではなく、『人』と言われている。つまり男一人と女一人が結婚をするとき、神は彼らの罪を許したもうのじゃ。あなたはおそらく『罪が砕け散ると言いますが、多くの善行に預かれなかった娘たちはどうすれば良いのですか』と言うであろう。実は、神は偉大な事柄を彼女らには与えておる。それはな、神の心にかなった子供たちを育てるということじゃ。」ラビはまた彼女が花婿を愛することができるよう、また彼女の心が彼に引付けられるよう、彼女の前に花婿への賞賛の言葉を述べた。またラビは聖櫃のことについて彼女は黙っておくべきこと、やがて彼自身がその聖櫃をシナゴグに戻すよう取り計らうこと、良き神が彼女のために罪の贖いをなしてくださるだろうことを示唆した。花嫁がラビの家を出た後、ラビはアヒエゼル氏に使いを出しベン・ウリーの聖櫃をシナゴグに入れるよう言い送った。人々は聖櫃を運び入れようと出かけたがそれを見出さなかった。盗まれたのか、保管されたのか、はたまた天に昇ったのか、一体誰が語ることができよう？誰が言うことができよう？

昼は去り、陽は沈んだ。エルサレムの全ての名士たちは、アヒエゼル氏の娘の婚礼を祝おうと彼の邸宅に集まって来た。エルサレムは麗の光に照らされ、庭の木々はレバノンの杉のように香っていた⁶⁵⁾。演奏者たちは楽器を取り出し、召使いたちは手を打ち叩いて歓

62) つまり紀元70年の神殿崩壊以来、という意味。エルサレムにおける最大の婚礼になるという意味。聖書では婚礼の喜びが絶えることはエルサレム崩壊の象徴であり、婚礼の喜びはエルサレム再建への象徴ある。エレミヤ書7章34節、33章11節参照。

63) バビロニア・タルムード、キドゥシンの項39-bなど、「弁論に優れた人」の意味。

64) バビロニア・タルムード、イエバモットの項63-b。

65) ホセア書14章7節「その若枝は広がり、オリーブのように美しく、レバノンの杉のように香る。」

喜の宴を盛り上げた。しかしこの場所には悲しみのようなものが覆い、おお神よ救い給え、それは天蓋^{フツパー}を押しやり、彼らの頭からまさにそれを引き裂いた。人々は結婚の喜びを分かちため、アヒエゼル氏の祝宴の席についた。賢者たちののどはご馳走と香り高いぶどう酒、歌と喜びの声とで満たされた。道化師は義人たちの踊りを披露し、義人たちは花婿、花嫁を喜ばせるため踊りを踊った。しかしこのお似合いの夫婦にはどちらにも悲しみがあり、彼らの間には壁があってお互いを遠ざけあった。そして彼らが初夜の別室に案内された後も、一晩中お互いに近づくことはなかった。彼は部屋の隅に座ってあることを考え、彼女はもう一方の隅に座って別のことを考えていた。彼の思いは彼の母親が亡くなってこの方、近所のフリーデレの母親が手伝いに来ている父の家に向けられており、またディナーの思いは聖櫃の出来事と、町から消えていなくなり、誰もその居場所を知らない聖櫃の作者である芸術家に向けられていた。

朝の祈りになり、ディナーの夫は祈禱着^{タリート}に身を包み祈りの小箱^{デファイリン}を身に着けた。婚礼後七日間の祝宴の間、破壊の悪霊から守るため花婿は一人で放っておかれない。しかし破壊の悪霊はすでに彼の心を支配しており、彼を悲しみに陥れていた。そして彼がシェマーの祈りを唱えるために心を集中し、手で目を覆い隠し、思いが乱れないようにと「唯一の」を長く唱える時⁶⁶⁾に限ってフリーデレが彼の手の中に入り込み、そして彼の目の前にやって来て立つのであった。ひとたび彼女の臨在⁶⁷⁾が現れると、彼が祈りの小箱^{デファイリン}を取り外してそれらを鞆に収めるまで二度とその場を離れなかった。その鞆はフリーデレが彼のために文字を織り込んで作ったものであった。彼はその鞆を祈禱着用^{タリート}の袋の中に入れていたので、皆の目には隠されて見えなくなった。ラビである彼の父は怒りと懸念をもって彼を眺めた。舅の家で一体何が彼にとって不足しているというのか？ 富というなら、富も名声もある。女性というなら、彼には美しく敬虔な女性がいる。住まいというなら、王の宮殿のような家があり、一体何がまだ不足していると言うのか？ 彼らは食事の席に着き、七つの祝福⁶⁸⁾を行い、花婿と花嫁を隣り合わせに座らせた。彼らはお互い近くに座ったが、しかし彼らの心はお互い遠く離れていた。

66) 「シェマー」の祈りは申命記 6 章 4 節の「聞け、イスラエルよ、我々の神主は、唯一の主である」という言葉では始まるが、その際「唯一の」という部分を長く延ばして唱えなければならぬ。

67) 原文を直訳すれば「彼女の臨在は縮小した」となる。これは本来ユダヤ神秘主義の概念で、全ての場所に存在する神の臨在を表わす。神の臨在をあらわすために使われるべき用語を使って、彼の心から消すことのできない思い出の女性の臨在を描写している。

68) ユダヤ教の結婚式で天蓋^{フツパー}の下で行われる祝福で、その後一週間の祝宴の期間、食事ごとに繰り返して行われる。

へい

彼らは互いに決して近寄ることはなかった。新しい月が訪れ、そして去った。たくさんの生徒がラビ・エゼキエルの教えを聞きに集まり、ユダヤ^{イェシバ}教学院は主の学びで溢れた。彼の言葉には恵みの教えがあり、彼が口にする注解、解釈、暗示は全てトラーの光を放っていた。しかし彼は教えながらも、その心は悲しみに苦しみ、あろうことか聖なる地に帰還する特権に預かったことさえ、有難くもないかのようであった。

ディナーはただ一人で座し、黙っていた。時々彼女はベン・ウリーが座り、聖櫃の作業をしていた場所に出かけては、しばらく埃にまみれた道具や絵の具をながめた。彼女は強く両手を握り合わせ、ベン・ウリーの歌っていた歌を瞳に涙が溢れ出るまで歌い続けた。隠れた場所で彼女の魂は高ぶりのために泣いた⁶⁹⁾。ある時ラビ・エゼキエルがそこを通りかかり、部屋から美しいメロディーが流れてくるのを聞いた。彼は立ち止まって聞いたが、人々は彼らに言った。「この声は人間のものではない。ベン・ウリーが部屋に座し、低い声で歌っていた時に、彼の口の息から生まれた霊の声だ」。ただちにラビ・エゼキエルはその場を離れた。それ以来彼は、その場所を通らなければならない時は、万に一つでも彼の耳にその声が入らないようにできるだけ遠くを歩いた。

夕刻、ラビ・エゼキエルは山々を歩いた。イスラエルの地の大賢者たちが散歩をし、彼らの従者たちがその前を棒を打ち叩きながら歩き、民衆は畏怖して恭しく出迎え、太陽が創造者にシャロームを言う時間になると⁷⁰⁾、一人ひとりの義人のために、紫色の天蓋を作り出していた。「ザカアー フラケヤ マン デザヘイ ベハイエオ レミシュレイ マドラー ベアルアー カデイシャー、ヴェ ロー オッド エラ イー ザヘイ ベハイエオーザヘイ レイトウマシュカ アレヤ ルーハー カデイシャー タデイール」、その意味は、「人生において聖なる地に居を定めることを獲得した者の報酬は、なんと祝福されていることか。もし彼がすでに人生で獲得したとすれば、彼には永遠に聖なる霊が留まり続ける⁷¹⁾。」ラビ・エゼキエルの両足はエルサレムの門の内に立っていた⁷²⁾ のであ

69) エレミヤ書13章17節「私の魂はひそかな所で、あなたがた高ぶりのために泣く」。

70) バビロニア・タルムード、サンヘドリンの項91-b「なぜ太陽は西に沈むのか・・創造主にシャロームを言うため」という議論を受け、「夕刻」の意味。

71) ゴハル（ユダヤ神秘主義の聖典）、アハレイ・モット、72-2、アグノンはまず原文のアラム語で引用したのち、ヘブライ語でその解釈を書いている。ここではアラム語部分はカタカナとして、ヘブライ語の解釈部分を翻訳した。

72) 詩篇122篇2節「エルサレムよ、我らの足はあなたの門のうちに立っている」と、エルサレムへの巡礼の喜びを歌った詩。

るが、しかし彼の両目と心とは流浪の地の律法学院とユダヤ教学院とに向けられ、彼は故郷の町の若者たちと野に遊び、夕刻の澄んだ空気を呼吸することばかり空想し考えにふけていた。

ある時彼らは、そこに女友達たちと座して歌を歌うフリーデレに出会った。

遠く離れた地へ彼は連れ去られました
 大きなのはその持参金でしょう
 彼はそのような義父^{おとう}さまを求めました
 誰が彼に苦言を呈してくれましょう

ある日、流浪の地からラビの遣いが大富豪の婿に手紙をもってエルサレムに戻って来た。父親は無事町に帰ってきて、かつてのように今も元気に語らい教えている。そして息子に、フリーデレは夫にめぐり合って母親と共にほかの町に住むために移って行き、今は使用人の妻が彼の世話をしている、ということを加えて伝えた。ラビ・エゼキエルはその手紙を読み、泣いた。フリーデレは他人の妻になってしまい、彼は彼女のことをいろいろ思いめぐらした。彼の妻はどこにいるのか？何度も彼の妻は彼のそばを通った。しかし彼女は顔をこちらに向け、彼は顔をあちらに向けた。

新しい月が訪れ、そして去った。ユダヤ教学院からはだんだんと人気がなくなってきた。生徒たちはひっそりと遠ざかり、庭の木の枝を折って棒をつくり出て行った。誰もがラビ・エゼキエルの魂が病に侵されていることを知った。おお神よ、救いたまえ。アヒエゼル氏は、彼の行為には祝福が伴っていないのを見て、この結婚が失敗であり、それどころか結婚でさえなかったことに気がついた。

夫婦はうつむいたままでラビの前に立った。ラビ・エゼキエルは離縁状を妻に渡した。彼は結婚の時に彼女を見なかったように、離婚の時にも彼女を見なかった。彼女は、彼が「あなたは私の妻として聖別された⁷³⁾」と言った時、その言葉を聞いていなかったと同様、「あなたは離縁された」という言葉も聞いていなかった。我々の父祖たちは、誰であれ最初の妻を離縁する者は祭壇でさえその上に涙を流す⁷⁴⁾、と言った。しかしここでは、すで

73) 結婚の誓約式で男性が女性に対して述べる言葉。

74) バビロニア・タルムード、ギティンの項90-bなど。この言葉はタルムードではマラキ書2章13節「泣きながら、叫びながら、涙を持って祭壇を覆っている」という箇所に対する注解として語られる。タルムードでは離婚に対する戒めとしてこの言葉が語られるが、それはマラキ書が、「若いときの妻を裏切って離縁をした」ことが原因で、イスラエルの民が祭壇の上で涙を流す結果となった、と書いているからである。マラキ書ではこの「離縁」は、

に彼が彼女を娶ったときに祭壇は涙を流していたのである。しばらくしてアヒエゼル氏は娘と共にエルサレムを去った。彼はここに定住できず、また彼の修復も成らなかった。彼は恥辱と落胆の中に出て行った。邸宅は閉じられ、ユダヤ教学院は空になった。この大富豪に敬意を表してシナゴグに集まっていた人々も、最初のミンハーの祈り⁷⁵⁾にさえ来なくなった。

ヴァヴ

その夜、ラビがゲマラー⁷⁶⁾を学びつつ、うつらうつらしていた時である。彼は自分が聖地追放の判決を受ける夢を見た。朝になりラビは夢を解き明かして一日中断食をした。少し食事をして再び学習に向かった時、ある声のようなものを聞いた。彼が目をあげると、そこには黒で身を覆い、装身具もつけていない美しい女性の姿をした臨在を見た。彼女は悲しみに暮れて彼の方にその頭を振っていた。ラビは眠りから覚め、衣服を裂き、泣いて夢を解き明かし、一昼夜断食をし、そして夜中には夢で解決を求めた。彼は天から目には隠された事柄をいくつか見せられた。多くの魂が困惑し、深い悲しみの中で彼女たちの夫を探していた。彼は眺め、目を凝らし、そしてベン・ウリーを見た。ベン・ウリーは彼に言った。「なぜ私が主の嗣業と結びつこうとした時、私を追放したのですか？」ラビは言った。「これはわが息子、ベン・ウリーの声ですか？」ラビはすぐに声を上げて泣いた。泣いているうちにラビは目覚め、これには深い理由があることを悟った。彼は手を伸ばして服を着、杖とかばんを取って妻に言った。「わが娘よ、私を止めるではないぞ。私は聖地追放の罪を負い、アグノットを修復する義務を課せられた」と言い残し、メズザーに接吻をして出かけた。その後彼を探しても見出すことはできなかった。

彼は未だに道に迷っていると言われている。一人の年老いたラビの使者が、流浪の地のある律法学院ベイトミッドラッシュにいた時のことである。ある夜彼はうとうととしていた。彼は眠りの中で叫び声のようなものを聞いた。彼は目覚め、かのラビが一人の青年のそばに立って、彼を引っ張っている様子を見た。使者はおののいて叫び声をあげた。「ラビ、あなたはここにおら

イスラエルの民が神との契約を破ったことへの比喩的表現として使われるのであるが、タルムードではそれを実際の離婚の話として活用している。アグノンはこの離縁の物語の中でこのタルムードの言葉を引用しつつ、この言葉のおおもとであるマラキ書の比喩的な意味合いを意識して使っていると思われる。

75) 朝の祈りを忘れた人は、午後の祈りである「ミンハーの祈り」を二度祈らなければならないが、その最初の祈りのこと。

76) タルムードのこと。

れたのですか？」すぐにラビの姿は消えた。その青年は使者に「律法学院に人が誰もいない時間になると、東壁の装飾⁷⁷⁾を描いているのだ」と告白した。使者の証言によれば、その東壁の装飾は見事な手の業で⁷⁸⁾、青年が絵画に熱中していると突然一人の老人が立ち、彼の外套を引っ張って彼の耳に「さあ、エルサレムに上ろうではないか」と囁いたというのである。

ここから後のことについては、多くの語り部たちが、かのラビは混沌の世界⁷⁹⁾に — おお神よ救い給え — 入り込んだと語り始めた。これに関して我々は驚くべき不思議な出来事をいくつか聞いた。長い年月をかけ多くの国々を歩き巡った故ラビ・ニスィームは「これは疑いもなく確かなことなのだが、私は彼が懐に子供を抱き、赤い風呂敷を広げて海を渡っているのを見た⁸⁰⁾。彼を見た時間は夕暮れ時ではあったが、聖なる御名に賭けてその男は間違いなく彼であった。ただその子供は誰であるか分からなかった」と語っていた。

今では彼は聖なる地を巡り歩いていると言われている。偉大な者たちはこれを疑い、中には嘲笑する者もある。しかし学校の子供たちは、夕方になるとひとりの老人が彼らと出会い、彼らに近づき、彼らの目を見つめ、そしていなくなることがたびたびあると語っている。ここまで我々が語ってきた出来事を知る者は、この老人こそはかのラビであると言っている。神のみがその答えをご存知である。

77) シナゴークや家の東側の壁。ヨーロッパから見るとエルサレムは東方に当たるため、エルサレムに向けて建てられるシナゴークであれば東側に聖櫃とトーラーの巻き物が置かれる。家においても東側の壁に「ミズラハ（東）」という文字を入れた、伝統的な模様や絵画を描いた壁飾りを吊るす習慣があった。

78) イザヤ書60章21節、「神の手の業」の意味。

79) ユダヤ神秘主義の用語で、聖なる霊による修復を必要とする、多くの魂が迷い込んでいる世界。

80) ユダヤ神秘主義の思想に「信仰があるなら、風呂敷に乗って海を渡ることもできる」というものがあり、またハスイディズムの創始者、バアル・シェム・トヴもそう語っていたと伝えられている。

参考文献

- ゲルシヨム・ショーレム著 小岸昭／岡部仁訳 [2004] 『カバラとその象徴的表現』, 法政大学出版局
- 手島勲矢 (編) [2002] 『わかるユダヤ学』, 日本実業出版社
- 野村真理 [1999] 『ウィーンのユダヤ人』, 御茶の水書房
- 『ノーベル賞文学全集 15 スタインベック・アグノン』 [1971], 主婦の友社
- 共同訳聖書実行委員会 [1992] 『新共同訳聖書』, 日本聖書協会
- Ben-Sasson, H.H. [1977], "History of the Jewish People" vol.3, Harvard University Press
- Brown, F.; Driver, S. R.; Briggs, C. A. [1951], "Hebrew and English Lexicon of the Old Testament", Clarendon Press
- Stinger, S. [1978], "History of the Jewish People" vol.5, 6, Harvard University Press
- Waxman, M. [1938] "A History of Jewish Literature", Bloch Publishing co.
- Old Testament "Biblia Hebraica" [1984], Deutsche Bibelgesellschaft
- עגנון, שמואל יוסף [1978] "אלו ואלו", הוצאת שוקן
(Agnon, Shmuel Yosef, [1978] "Elu veelu" Shocken Publishing House)
- עגנון, שמואל יוסף [2000] "מעצמי אל עצמי", הוצאת שוקן
(Agnon, Shmuel Yosef, [2000] "Meatsmi El Atsmi" Shocken Publishing House)
- שקד, גרשון [1976] "אמנות הסיפור של עגנון" ספרית פועלים
(Shaked, Gershon [1976] "The Narrative art of S.Y. Agnon", Sifriyat Poalim)
- שקד, גרשון [1983] "הסיפורת העברית" 1880-1980 כרך ב' בארץ ובתפוצה
(Shaked, Gershon [1983] "Hebrew Narrative Fiction 1880-1980 In the Land of Israel and Diaspora", Hakibbutz Hameuchad and Keter)
- שלום, גרשום [1989] "עוד דבר" הוצאת עם עובד
(Sholem, Gershom [1989] "Explications and Implications", Am Oved Publishers)
- ויס, הלל [1979] "שגנון עגונות עידו ועינים", האוניברסיטה הפתוחה
(Weiss, ZHilel [1979] "Agnon Agunot ido veeinam", Everyman's University)
- ויס, הלל [1985] "קול הנשמה", הוצאת אוניברסיטת בר-אילן
(Weiss, Hilel [1985] "Kol ha-Neshamah", Bar Ilan University)
- לוינסקי, יום-טוב [1975], "איציקלופדיה של הווי ומסורת ביהדות" דביר
(Lewinsky, Yom-Tov (1975), "Encyclopedia of Folklore, Customs, and Tradishon in Judaism")
- אויניברסיטת בר-אילן [2001], "פרוייקט הש"ת גירסה 9", אוניברסיטת בר-אילן
(Bar Ilan University [2001], "The Respnsa Project version 9" (CD-ROM), Bar Ilan University)